

## 新潟県の訪問ステーションの利用者及び介護者に関する実態調査

著者	中川 泉, 長部 タミ, 高橋 悦子, 細道 奈緒子, 三宅 久枝, 伊豆 麻子, 炭谷 靖子, 安藤 博子
雑誌名	看護研究交流センター年報
巻	18
ページ	13-14
発行年	2007-09
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10631/383">http://hdl.handle.net/10631/383</a>

## 新潟県の訪問看護ステーションの利用者及び介護者に関する実態調査

中川泉<sup>1)</sup>，長部タミ<sup>2)</sup>，高橋悦子<sup>2)</sup>，細道奈緒子<sup>3)</sup>，  
三宅久枝<sup>4)</sup>，伊豆麻子<sup>4)</sup>，炭谷靖子<sup>5)</sup>，安藤博子<sup>6)</sup>

- 1) 新潟県立看護大学，2) 新潟県看護協会，3) 訪問看護ステーション新潟，  
4) 新潟青陵大学，5) 富山医科薬科大学，6) 新潟県ナースセンター

キーワード：訪問看護ステーション，実態調査，利用者，介護者

### 目的

新潟県訪問看護事業の推進，訪問看護ステーションの質向上に資する基礎資料を得る目的で以下の事柄を明らかにする。

1. 新潟県内の訪問看護ステーションの利用実態を明らかにする。
2. 利用者や家族が感じている訪問看護サービスの効果を明らかにする。
3. 利用者や家族の訪問看護サービスに対する満足感を明らかにする。
4. 介護者の介護生活の実態を明らかにする。
5. 介護者が考えている自宅での看取りを可能にする条件を明らかにする。
6. 介護者の病院と自宅での看取りのイメージを明らかにする。
7. 在宅死割合の少ない A 県の状況と新潟県の状況を比較し，その差から在宅死を可能とする要因を推察する。（次年度の課題）

### 研究方法

#### 1. 実施方法

「新潟県訪問看護ステーション利用者実態調査検討委員会」を設置し，住谷（出版年）の調査用紙を基礎に調査項目を検討した。調査用紙は，新潟県内全訪問看護ステーション 106 事業所へ送付し，回答可能な全利用者（利用者本人とその介護者）への配布を依頼した。調査票は利用者自身が無記名で記入し，回収用封筒に封入した状態で訪問看護師に渡してもらい，訪問看護ステーションからまとめて研究者へ返送してもらった。なお，利用者の要望や状態により代理記入も可能とした。

#### 2. 調査対象

新潟県内の全訪問看護ステーション 106 事業所の利用者とその介護者

#### 3. 調査期間

平成 17 年 8 月 20 日～9 月 30 日

#### 4. 倫理的配慮

調査に際し，協力依頼及び調査目的，方法を記した説明書を同封し，調査を依頼した。記入した調査票は無記名であり封入後，開封は研究者が行うため，個人情報保護されること，また記入したことと不利益をこうむることはないことを明記した。

### 結果

#### 1. 回収率

対象者数：5435（利用者 5435 人，介護者 5435 人） 有効回収数：3012（回収率 55%）

#### 2. 調査結果の概要

##### 1) 要介護者について

60%が女性，80 歳代が最多で，70 歳～100 歳が 80%を占める。要介護度は，5 が最も多く 35%，4 とあわせ 50%を超える。痴呆は 40%にみられる。訪問看護利用期間は，1 年以上が 70%，1～5 年で 80%，5 年以上が 17%。訪問看護を勧めた人は，ケアネジャー 45%，医師 26%。その他の記述で家族や自分で調べたという回答が多く見られた。訪問看護の利用回数は，月に 3～5 回が 50%，6～

10回が24%。滞在時間は、30分～60分が60%、1時間～1.5時間が20%弱、30分未満も20%弱。緊急時訪問看護加算契約は半数が契約しておらず、理由の1位が「主治医が対応するから必要ない」、次いで「制度をしらなかったから」であった。訪問看護を利用する主な疾患は、脳血管疾患が30%、痴呆と床ずれが各7%、その他では難病が多かった。同居家族人数は、2人が22%、3人が21%、1人が12%。訪問看護以外で利用しているサービスは通所介護と訪問介護が多く、次いでショートステイだった。受ける医療処置では、浣腸・排便、床ずれの処置、尿管管理、経管栄養の順が多かった。看護サービスの利用目的は、「その他(自由記述)」が最も多く、内訳は、吸引、コミュニケーションでの安心、主治医との連携など多様であった。次が病状の観察だった。看護サービスの効果については状態変化、満足感、精神的な落ち着きに関して、とても思うが50%、少し思うと合わせ90%が効果ありとしている。介護負担、在宅の継続に関して、80%が効果ありとしている。また、訪問看護師の態度は、丁寧で礼儀正しいと80%が評価。技術の正確性、主治医との連絡、安心感については70%が「とても思う」とし、「少し思う」とあわせると90%になる。利用継続の意向は「とても思う」が85%、知り合いに勧めるは「とても思う」が60%、「少し思う」とあわせ90%を超える。在宅死に関する項目では、自分の最後の場所を自宅とした人が72%、病院が20%だった。

## 2) 介護者について

介護者の年齢は、60歳以上が60%で、女性が75%、続柄では娘・息子が29%、妻28%、嫁23%だった。仕事は、無職が69%、自営が14%、常勤が12%だった。要介護者数は1人が90%、2人が9%だった。介護時間帯は日中常時が68%、夜間常時が53%、介護協力者がいつもいるが21%、何かあったら頼めるが36%、誰もいないが19%だった。健康状態は、とてもよいと、まあまあよいで66%、まったく健康でないが、5.9%だった。今後の在宅介護希望については、非常に思うが33%、やや思うが47%、まったく思わないが38%だった。要介護者を看取りたい場所は、自宅が59%、病院が35%だった。看取りたい場所を自宅以外と答えた介護者の自宅での看取りの条件に関して、緊急時の往診医師がいること、主治医と訪問看護師の連絡がしっかり取れていることが、「とても思う」とした人が60%、次いで家族が協力してくれるが56%だった。

介護者の現在の状況について、趣味や社会活動などの時間が取れない「非常に思う」が32%、介護のために体の負担がかかっている「非常に思う」28%、「思わない」31%、病院や施設で介護してほしい「非常に思う」14%、「思わない」58%、誰かに介護を代わりにしてもらいたい「非常に思う」17%、「思わない」49%、介護に必要な費用が家計を圧迫している「非常に思う」8.3%「思わない」66%となっている。また、介護は義務感ではなく望んでしている「非常に思う」17%、「思わない」51%、介護が生きがいになっている「非常に思う」10%、「思わない」68%、介護のおかげで人間として成長したと思う「非常に思う」17%、「思わない」43%、介護の苦労はあっても前向きに考えていきたい「非常に思う」38%、「思わない」13%となっている。

## 考察

調査の結果から、訪問看護の対象者は、80歳代の後期高齢、重介護度の要介護者が多く、疾患は脳血管疾患と床ずれそして難病が多い。訪問回数は週1から2回、滞在時間は、1回1時間以内が多く、利用目的からしっかりした病状観察と多様なニーズへの対応が期待されていることがわかった。医療処置では浣腸・排便が多く、排便コントロールのニーズが高い。看護サービスの効果を利用者の8割が実感しており、在宅継続、安心感、介護負担につながっていると判断している。また看護技術等への評価も高い。最後の場所については要介護者の7割が、介護者は6割が自宅をあげ、在宅希望が多い。また在宅死の重要な条件として医師の緊急時対応が挙げられている。介護生活については、強い拒否感は少なく、身体的な大変さも強く感じている数は少ない。また前向きに捉えている介護者が多いことから、訪問看護等の在宅サービスの利用が定着し、現在は多くの介護者の生活が過酷ではなくなっていることが考察される。